

SL エスエル 医療グループ ニュース

No.154 2020.4

発行所 名古屋市中区新栄町1-3 日丸名古屋ビル エスエル医療グループ 編集部(鈴木・大野・吉田・長谷川) 発行日 2020年4月1日



「春うらら」 颯田圭子氏

今月のことば

2019年12月以降、中国湖北省武漢市を中心に発生した新型コロナウイルス感染症（WHOは、このウイルスを“COVID-19”と名付けました）は短期間で世界に広まっています。

日本でも感染経路のわからない感染者も出現し、このウイルスによる流行の初期の段階と思われる（2月中旬）。一般論として、ウイルスの感染性（他の人へのうつりやすさ）と病原性（毒力）は両立しない事になっています。つまり、感染性の強いウイルスは病原性が低く、逆に感染性の低いウイルスは病原性が高いと言われています。

今回の新型コロナウイルスは、感染性が高く、病原性は比較的低いのではないかと考えられます。新型コロナウイルスもインフルエンザウイルスと同じコロナウイルスですので、暖かくなる4月頃には収束に向かうのではないかと期待と希望を抱いています。 (K.S)

〈目次〉

今月のことば	1
頭蓋骨は語る（第11話）	2～3
……………古井脳神経外科 院長 古井倫士	
じんじん響く腎のはなし	4
……………さかもと内科腎クリニック 院長 坂本いずみ	
岩波茂雄にとってのプラトン	5
……………小林勇	
……………中川内科 院長 中川喬市	
新しいページ	6
……………三浦内科 院長 三浦利重	
友達だけど美味しそう	7
……………はまだ代謝内科 院長 濱田洋司	
栄（SL医療グループ） 近辺—32	8
……………高校時代の生物実験	
……………森川クリニック 院長 森川建基	

頭蓋骨は語る (第11話)

古井脳神経外科 院長 古井倫士



ツタンカーメン

筆者はことさらに旅行好きではなく、どちらかといえば出不精の部に分類されるのが妥当と自覚するのですが、それでも死ぬまえに一度はクフ王、カウラ王、メンカウラ王建造のピラミッドの並ぶさまを観てみたいとは思っています。高校の世界史参考書によれば、最大のクフ王のものは一辺233メートル、高さ147メートルに及び、平均2.5トンの石灰岩が230万個も積み重ねられているとのこと。いまから5000年近くも遡る古王国時代の建造物です。

歴史的な遺産を国際的な協力によって後世に遺すことを目指して1972年にユネスコ(国連教育科学文化機関)は世界遺産条約(世界の文化遺産および自然遺産の保護に関する条約)を採択します。1975年に条約は発効され、1978年に12件の遺跡が世界遺産として登録され、翌年にはピラミッドに代表される「メンフィスとその聖地遺跡—ギザからダハシールまでのピラミッド遺跡」もその仲間入りをします。

規模からいえば20000キロともいう長さをもって繋がる万里の長城も為政者の執念を感じさせませんが、断片的には石造りの砦のようなものです。ギアナ高地の巨石も壮観さでは負けないのですが、あくまで大地の隆起の名残の生んだ奇景です。富士山も流麗な稜線を引くわが国の誇りですが、やはり自然のなせる技です。アラブ首長国連邦のドバイに聳える828メートルのビルはあくまで現代の建築技術の賜物です。砂漠に屹立する三大ピラミッドをそれらと同列の遺産とは思えない筆者なのですが、いまだ目の当たりにする機会を創れずにいます。

今回は一見を宿題としているピラミッドを遺した古代エジプトの謎に包まれた若き王ツタンカーメンを端緒として話を進めていこうかと思えます。ただ、古代エジプトをテーマとして研究に勤しむ学者は国外のみならずわが国にも少なくありません。素人の筆者の出番などありません。それに、ここは「頭蓋骨を語る」ですから脳外科医としての知識をもとにまずは若きファラオの遺した頭蓋骨に的を絞ってみます。

ツタンカーメン(トウトアンクアメンと表記するのが正しいらしいのですがここでは慣習に従う)の王墓は1922年11月4日にイギリス人ハワード・カーターによって発見されます。発掘の後援者であったカーナビ卿の到着を待って同月26日、碎石で厚く覆われた入口を解放し、王墓に足を踏み入れます。他の王墓のほとんどが盗掘に遭うなかにあって手付かずのままおよそ2000もの財宝とともに玄室に安置されたツタンカーメンのミイラが発見されます。四重の厨子の中をさらに三重の人形棺に守られた石棺を開けると包帯に巻かれ、余りにも有名な黄金のマスクを付けたミイラが横臥していたのです。

黄金をふんだんに使用した絢爛な副葬品の調査はともかくとして、ミイラに関する最初の調査は王墓発見から3年を経た1925年11月にカーターらの立会い下でカイロ大学の解剖学者デリーによって行われます。

黄金のマスクを外し、13層にも重ねられた包帯を切り開くと、右腕を伸ばし左腕を上腹部に置いた王

の姿が3000年以上のときを経て現われます。年齢は歴史的な経緯から推測されたように18から20歳でいど、身長は170センチ弱であったといえます。頭蓋骨は頭頂部(頭のてっぺん)が目立って平坦であったと指摘されます(邦訳ではよく扁平頭蓋という表現されますが、専門的にはそれは別の疾患を意味します)。ひととおりの観察が終わるとミイラは再び地下の墳墓に戻されます。

医学検査法の発達に伴って1968年、ミイラはイギリス人ロナルド・ハリソンによってレントゲン装置を用いた調査がなされます。彼はミイラの頭蓋後部の骨(後頭骨)の厚みが薄いと感想を抱き、骨折または骨の直下に出血の起っていた可能性があるといます。また、頭蓋骨の中にふたつの小さな骨片の存在を見つけ、頭部に何らかの打撃が加えられた証拠なのではないかと主張します。若くして20歳前後で死亡した事実と相俟って俄にツタンカーメン暗殺説が拡まります。

アメンホテプ3世あるいはその子アメンホテプ4世の子ともいわれるツタンカーメンは、10歳にも満たない幼少期に即位します。先王のアメンホテプ4世が若くして32歳で死亡するからです。

古代エジプトの信仰は太陽神ラーを筆頭とする多神教でしたが、紀元前21世紀ごろに都がメンフィス(カイロの北西)からテーベ(現在のルクソール)に移されると、徐々に新都の守護神であるアテン神が神々の中心となり、これを信仰するアテン神官団が富と権力をもつようになっていきます。アメンホテプ4世はこの勢力に抗って都をテーベの北西の地アマルナに遷しアメン神を唯一の信仰対象とします。後を継いだツタンカーメンがいかなる方針で施政に携わるのかはアテン神官団の深刻な関心事であったはずですが、また、幼少な王に替わって権力を手にしようとする人物も少なくなかったはずですが、アメンホテプ4世の妃で、ベルリンの博物館に所蔵されるその胸像で有名なネフェルティティも夫の死後3年で亡くなります。王朝内に少なからぬ不穏さが漂い始めたであろう、そんな時期にツタンカーメンは若くして亡くなったとされるのですから、暗殺説は3000年後の人々の好奇心を駆り立てるのに十分でした。

ハリソンによる調査結果の真偽について検討する者も現われます。彼らによれば頭蓋内に認められたふたつの骨片は当初あったと報告された部位と異なる位置に写っているので王の死亡時から存在したのではなく、発掘時に紛れ込んだものではないかと推測します。



ミイラの作成過程では死後の再生を可能とするために腐敗を避けるべく頭蓋内の脳は取り省かれます。古代エジプト人には相当の解剖学的知識があつて、その作業は鼻腔から行なわれました。鼻腔を

そのまま奥に進むと頭蓋の底（頭蓋底）の中央あたりのもっとも骨の薄い部分に達します。そこを穿って脳を除去したのち、腐敗防止のために樹脂やゴムといった樹液がほぼ空洞化した頭蓋内に注入されて鼻腔は閉じられます。文中に挿入したレントゲン写真の頭蓋骨の周囲が白っぽく写っているのは樹脂の存在によるものです。

もしハリソンが存在を指摘した骨片が骨折によって剥離したものならば、鼻腔から頭蓋内に注入された樹脂で固まって移動することはないはずで、頭蓋底には脳の延長である脊髄の通る比較的大きい孔（大後頭孔）が空いているのですが、デリーらはここから頭蓋の中を覗こうとし、その後部において邪魔になる第一頸椎の椎弓を除去した。その一部が頭蓋内に紛れ込んだのではないかと推測するのです。

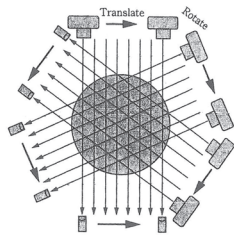
また、骨折の可能性を含めて後頭骨が通常より薄く見えたのは頭蓋の撮影方向が正確に水平でないために左右の骨が微妙にずれて写ったためだろうと結論します。そもそも、脳の内外に出血を起こしたからといって、その外側の骨が菲薄化などということはありません。

いろいろな検討を経るにしたがって撲殺説の勢いは削がれていきます。2005年にはエジプト人考古学者ザヒ・ハワスとカイロ大学の解剖学者や放射線学者らによってCT スキャンを用いた調査が行なわれます。それによれば、骨と骨の接合面（縫合線）は骨化せずに軟らかいことから18～20歳程度の若者であったことはこれまでの推測と矛盾しませんでした。巷間を騒がせた殴打による骨折は見つからず、扁平頭蓋と表現されたのもただ頭蓋の前後径が長い長頭症に過ぎませんでした。ここに到って撲殺説は影を潜め、好事家は落胆することになります。

それにしても、オシリスの東ねる冥界での再生を願ったツタンカーメンにとって華麗な装飾を施した幾多の副葬品と共に願いを全うできぬままこの世に遣った自らの亡骸が何十世紀ものときを経てレントゲンやCT装置（コンピュータ断層撮影）によってあれやこれやと調べられたのは毫も想像しない事態だったでしょう。

レントゲン撮影法の発展は周知のように1895年のヴィルヘルム・レントゲンによるX線の発見をきっかけにしたものです。その発見に対して彼は1901年の第一回のノーベル物理学賞の栄に浴します。物質を透過するX線の性質は医学におけるレントゲン装置の開発に繋がり、1897年（明治30年）にはわが国にもドイツのシーメンス社製の装置が東京帝国大学医学部の解剖学教室に導入されます。国内でも装置が開発され、いろいろ改良も重ねられ、疾病の診断する手段として欠かせない装置としてこんにちに到ります。そして、1968年（昭和43年）には同じX線を用いて人体の断層面を画像化し、三次元画像としても描出することのできるCT装置が開発されます。

CT装置は撮影の対象とした臓器を挟むようにX線の発生装置とX線の透過度を検知する検出器を対面させたまま平行または回転させ、得られる透過度の違いから臓器の各部におけるそれを算出し、画像の濃淡として構成します。臓器各部のX線透過度を知るには煩雑な計算が必要でコンピュータの登場によってCT装



置は現実のものになったのです。それを行なったイギリスの技師ゴッドフリー・ハウズフィールドと協力者のアメリカ人アラン・コーミックには1979年（昭和54年）にノーベル生理学医学賞が与えられます。現在の器械はX線の放射法を変化させる工夫によって当初の器械より短時間の画像化が可能になっていますが、基本的な仕組みは同じで彼らの業績は臨床医学を飛躍的に発展させます。

分野の違いはあっても、ノーベル賞は一途に生きて成果を挙げた者に対する世界の認めた最高の賞といえます。受賞は時の運に左右されます。対象は生存者に限られますから彼や彼女は取り巻く環境や置かれた時代に恵まれたときははじめて賞を手にすることができるのです。

実は、CT装置の原理はある日本人医学者が終戦直後に考えついでいて、実験もしていたのです。そのひとは昭和13年に東北大学を卒業し、弘前大学などの教職を経て1954年から1974年まで名古屋大学医学部の放射線学教室の教授を勤めた高橋信次博士で、1946年（昭和21年）ごろにはCT装置の原型とでもいべき装置を造って身体の断層面の撮影を成功させます。ただ、身体を回転しながらスリットを通して断続的に放射されるX線を通るフィルムに感光として捉えたため、得られる断面画像は朦朧としていて現代のCT画像に見るように鮮明ではありませんでした。断層面の細部それぞれのX線透過度を評価して断層画像を構成するには多大な数学的計算が必要で、それを可能にするコンピュータはまだ応用可能な段階になかったのです。最初の電子式計算機は1946年に製作されますが、商用機が完成するのは1950年のことです。

科学的発想は遅すぎるのはむしろ、かといって早過ぎてもいけません。時の味方を必要とします。高橋博士の着想は時機尚早であったというべきなのでしょう。それでも、その着想は学会で発表されていたのですから共同受賞者に選ばれてもよかった気もします。ストックホルム（スウェーデン）のカロリンスカ研究所におけるノーベル会議の構成員や彼らに指定された選考委員は博士の業績を承知していなかったのでしょうか。この時代はまだ東洋の日本人に対する偏見が残っていたのかもしれない。安部首相がトランプ大統領を平和賞に推薦したと噂されたように、ノーベル賞の候補になるには他からの推薦が必要なようです。放射線学は臨床医学に必須な学問でありながら内科や外科などのように医学界の主流としての扱いを受けていません。ひょっとして、博士を受賞対象として推薦する気運がわが国の医学界では希薄だったのでしょうか。それも時の運といえるのかもしれませんが、いろいろ推測はできますが、正確なところは筆者は知りません。

ノーベル賞に限らず顕彰の陰には色々な事情が絡んでいるはずで、それを支えながらも表に出られなかったひと、同じ発想をもちながら一歩及ばなかったひと、学問上の権威をもつ立場にいなかったひと、などなど名誉への距離を縮められなかった多くのひととびとがいたはずで、人生のできごとには必ず裏表があります。栄光に照らされる欣快あれば、その陰には羨望、暗闇には嫉妬や怨嗟が隠れているかもしれません。社会に生きるが故のヒトの性です。

ただ、博士はそれなりに幸いに恵まれました。ノーベル賞の選に洩れはしたものの、ハウズフィールドらの受賞と期を一にし、1979年に文化功労者の顕彰を受け、5年後の1984年には文化勲章を授与されます。ハウズフィールドらの受賞に影響されて氏の業績が表舞台に引き上げられたという印象をもつのですが、その経緯も筆者は知りません。

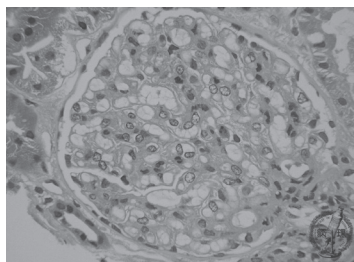
じんじん響く腎のはなし



さかもと内科腎クリニック 院長 坂本 いずみ

はじめまして。2020年1月に鈴木内科を承継いたしました坂本いずみと申します。25年にわたってエスエル医療グループで診療を続けてこられ、患者さんからの信頼もあつい鈴木善充先生の後任です。経験豊かなスタッフとともに、職責をしっかりと果たし、あたたかいクリニックとなるようがんばりたいと思います。

私の専門分野は、鈴木先生と同じ腎臓内科ですが、腎疾患の診療には、総合内科、膠原病、老年内科の知識も必要ですので、腎臓に軸足を置きつつこれらの分野の修行もしてきました。名古屋大学で研究していたころは腎病理（顕微鏡で腎臓を調べることです）に魅せられていました。小さな細胞が増殖したり壊死したり、細い血管が詰まったり破れたりすることが腎臓病の始まりです。なぜこのような変化が起きるのか、どうすれば変化を防ぐことができるのか、顕微鏡で覗く小さな世界は不思議がいっぱいで、興味が尽きませんでした。



写真：糸球体の顕微鏡写真
(日本病理学会コア画像より引用)

大学での研究が一段落してからは総合病院にもどり、腎臓病と透析治療を担当しました。ここでも腎病理は、患者さんの疾患の病態を考え治療方針をたてるうえでおいに役に立ちました。急性期の重症患者さんを助けるためにチームで診療にあたる毎日は、忙しくも充実していました。若い医師に教えながらともに学び、循環器・呼吸器・内分泌・消化器・血液内科などの専門内科や泌尿器科（腎臓の外科）と連携して治療にあたることもしばしばありました。患者さんを助けるといふひとつの目的のために力を合わせ、パズルのピースが合うように連携がうまくいったときには気持ちが高揚したものです。

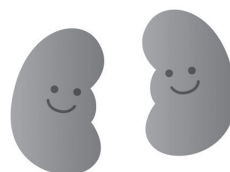
そして総合病院を辞し、これからは外来診療一筋に取り組みます。クリニック診療を始めて嬉し

かったのは、通院患者さんの多くが生活を楽しんでおられることです。病気のご苦勞話ばかりでなく、趣味のこと、ご自身の生きざま、これからやりたいこと、どう生きてどう死にたいのかなど様々なことをにこにこ話していただきます。総合病院の外来とは雰囲気がちがいで、患者さんとの距離がぐっと近くなったようで強くやりがいを感じています。

腎臓は健康な時にはどこにあるのか忘れられてしまうような目立たない臓器ですが、毎日コツコツと尿をつくり、血液から毒素を取り除き、ミネラルのバランスを整え、余分の水を排泄しています。腎臓は、助け合い精神も旺盛で、他の臓器と連携して血圧を維持したり、骨を丈夫にしたり、赤血球を作る手助けもします。また腎臓は、とても辛抱強く、傷んできても初期にはほとんど症状がありません。

腎臓の働きが2～3割程度にまで落ちてきて初めて自覚症状が現れます。それが慢性腎臓病です。ここまでくると進行を食い止めることはかなり難しくなっていますので、なにしろ早期発見が大切です。早期発見のためには尿検査と腎機能検査（血液検査）の健康診断を定期的に受けていただきたいと思います。もしタンパク尿や血尿が見つかったら、異常を起こしている原疾患を突き止めるための二次検査を行います。腎臓病は長い期間の治療が必要になることが多いので、はじめにしっかりした診断をつけることが大切です。重い病気の可能性があれば、病理診断（腎生検）を検討します。クリニックで行えないことは総合病院へ依頼します。診断がついたらそれぞれの疾患にあった治療のプランを立て、①薬物治療、②食事療法、③生活習慣の改善、の3つの治療を患者さんと二人三脚で継続していくこととなります。

エスエルグループに参加し、医師人生の次のステージを、この場所で患者さんに寄り添って過ごしていけることを幸せに思っています。よろしくお願ひします。



岩波茂雄にとってのプラトン小林勇

中川内科 院長 中川 喬 市



小林勇は大正9年17歳で岩波書店に入店した。昭和47年69歳で岩波を退いたが、以降も昭和56年11月78歳で死去するまで岩波書店のために寄与した。小林は岩波茂雄と幸田露伴の二人が自分の師であり恩人であるとした。この人は岩波書店の「学術文藝の各分野において真に価値のある図書」の刊行をめざし時流におもねることなく昭和10年代、20年の終戦まで軍部の圧迫に屈することなく良書の出版に徹する岩波茂雄の方針を貫いた。その間、店主と行を共にして各界のすぐれた人物に接する機会を与えられ、自身のすぐれた「人たらし能力」によって彼らの知遇を得、酒席をともにして人物の真髓をつかんだ。そしてその交遊録を生き生きと描き丁寧書き残した。そのことから、岩波店主のソクラテスに対して小林はプラトンの存在であったという喩えを思いついた次第である。

終戦後まもなく、これからという時に、岩波茂雄は21年4月脳卒中により64歳で死去、さらに幸田露伴は22年7月80歳で死去した。これら二人の「先生」の最期の枕頭に、のちの日本医師会長武見太郎国手を呼んだのは小林勇であった。すでに昭和2年岩波文庫発刊の頃から小林は幸田露伴の懐に飛び込んだ形でその住まいを気楽に訪問する仲となっていた。岩波文庫に『五重塔』が早速収載された。その後の二人の交流は『蝸牛庵訪問記』（1956年岩波書店）に詳しい。岩波茂雄との交流については『惜襟荘主人』に遺された。

小林勇が昭和56年（1981）死去したときに、武見太郎は弔辞を読み、その文は小林の人柄や経歴を極めて精確かつ簡潔にまとめてあり感銘深い。二人の最初の出遭いは昭和3年慶応医学部小泉丹教授のところであったことを始めに述べた上で続く、その弔辞を要約してここに紹介する。《…あなたは（略）岩波書店の学問の真実を追求する高度な志を、あらゆる方法で国民に浸透させる努力を続けられました。私たちの友人、たとえば中谷宇吉郎が病篤かったとき、彼の随筆集『冬の華』を生きているうちに本にしてあげたいというあなたの熱意と友情に対して私たち友人は本当に心から頭下がったものでした。その中谷君は回復し…略。（病は肝ジストマであった）私は長い間、幸田露伴先生からいつもあなたの素晴らしい行為に

ついて感謝しておられるという話を、往診のたびに承りました。露伴先生に対して子が親に仕える以上に、あなたは気を遣われました。それは偉大なる露伴の学問に対する尊敬から出たものであり、ふつうの出版業者の域のなかの仕事ではありませんでした（略）小泉信三先生は私に『小林君のためにみんなが本を書くんだよ』といわれたことがありました。（小林が岩波から一時独立して出版社を始めた時のこと）（略）あなたは戦争中、軍閥特高官僚によって徹底的な弾圧を受けながら、それに屈しませんでした。（略）戦後の難局もおおきなお努力によって乗り越えられ、本に飢えた学生が岩波書店の新刊書を手に入れるべく書店の前に列をなしていた姿は、ちょうど食糧のなかった時の行列と同じように見えました。（略）町人という言葉を私は愛します。あなたは日本の代表的町人でした。そしてそれに終始しました。私自身のことについても、あなたは時にいろいろ心配してくれたり、鼓舞激励してくれました。あなたの友情を私は一瞬たりとも忘れることはできません。お互いに真人間の姿を理解して付き合うものには何の怖れもなかったと思います。（略）》（『回想小林勇』谷川徹三・井上靖編、所収）

武見太郎元日本医師会長とこのように肝胆相照らす友情を持ちえた人は数少ないと思われる。その武見先生も2年のち昭和58年12月逝去された。

岩波書店は夏目漱石全集を出しているが、小林は漱石の弟子小宮豊隆と親しくして夏目のことを学んでいる。また漱石の第五高等学校以来の弟子である寺田寅彦（物理学者・随筆家）とも交流があった。その弟子中谷宇吉郎を援けたことは、武見先生も述べている。また哲学者三木清と親しく、同年代でもあり、その天才的な執筆力を支えた。芥川龍之介は自殺する前に自分の全集は漱石先生にならって岩波から出してほしいと言いついていた。幸田露伴全集はもとより、その息女幸田文全集も岩波の出版である。

岩波文庫の装幀は、平福百穂画伯によるものだが、そのモチーフは正倉院御物の鏡の文様からとられた。梅原龍三郎画伯はその派手でなくて飽きのこない美しさを褒め、表紙の色との調和も大変良いと高い評価を与えた。このエピソードは小林勇文集第11巻にある。

新しいページ

三浦内科 院長 **三 浦 利 重**

窓が開け放たれてゆくような緑の5月。三浦内科は閉院し、新たに岩瀬内科・消化器内科が誕生します。既に数年前からグループ内に新たな潮流が生じ、時代の要請に応じた体制が整いつつあります。三浦内科の閉院もその流れに乗っている面もあります。

思えば33年間、多くの方に支えられて来ました。個性的な独自の世界観を持つ方々とのお付き合いは、眼が開かれてゆくような経験でした。ここは素晴らしい学びの宿でした。「仰げば尊し」を歌いたい気分です。

一つのビルにほぼ全科が揃い、協力し合いながら全力で患者様の健康寿命を護る。そこにスタッフ全員のやりがい生まれ、患者様の安心が広がる。この奇跡的なシステムを構築された、(故) 向井長男先生にいつも感謝しています。

消化器系の患者さんは、その場で判断しなければ命取りになるケースも多く、寄る年波に毎日一人で、という仕事にわずかに困難を感じてきました。これからは岩瀬先生とともに、名誉院長として週3回ほどの診療に集中してゆきたいと思っています。

カルテの電子化を進めるため毎日遅くまで紙カルテを読み込みました。そこで気づいたのは大腸がんで苦しむ人が思いのほかに多いという事実でした。本来胃がんや食道がんに比べるとおとなしい部類のがんであるのに、それで命を落としたり、長い闘病生活に入る人たちを見るのはとても残念です。大腸がんは女性のがん死亡の第一位でもあり、男性も11人に1人は大腸がんにかかるといわれます。検査を億劫がるのは普通のことですが、総じて自分の体に無関心な方が大事な健康寿命をすり減らしている印象です。当グループでは、大野先生(注腸造影)、大岩先生、山内先生、そして5月に開業される岩瀬先生と、技術的にも優れた、大腸がんをよ

く知る先生が勢ぞろいしています。がんは症状もなく進行するのが特徴です。大腸内視鏡検査は、60代以上の人であれば便秘や下痢、腹痛といったありふれた症状のときでも一度は受けておいた方が安全です。検便も有効です。

もう一つ気になったのはあまりにも多くの方が、ピロリ菌の除菌後、胃の検査を受けなくなってしまふ事です。除菌が成功すれば将来胃がんになる可能性は50%ぐらい減るかもしれませんが、除菌に成功した方には、「素晴らしいね、これは100万円の宝くじに当たったぐらいの価値があるよ」と、ともに喜んでいたので、もう一言付け加えることも忘れませんでした。「除菌せずに85歳まで生きると、男性では8人に一人ぐらい胃がんになるけど、除菌できれば16人に1人ぐらいに減るよね。でも胃がんの高リスク群であることは変わらないから検査は忘れないでね。」と。

ほとんどの方は100万円の宝くじの話しか覚えていないようです。

例えばがん研有明病院には1年間に166名もの除菌後発見胃がんの方が来院されています。

胃がんも食道がんも50%ほどの方が内視鏡で切除できる時代です。私たちの願いはもし誰かががんになっても一月もせぬうちに元の生活に戻れることです。

健康長寿を願うのはごく自然な感情です。そのことが腑に落ちれば、とかく泥縄的になりやすい人生を、自分なりにデザインしてみようという新たな意欲が生じるのではないのでしょうか。それは生にしがみつくことをはるかに超えた、明るい日差しに満ちた私達の未来であるように思われます。そこでは多くの方が正しい情報を持ち、命を守るための検査を、自ら積極的に選択しているでしょう。

友達だけど美味しそう

はまだ代謝内科 院長 濱田 洋司

彼が突然我が家にやってきたのは、晩秋の早朝だった。庭でキュンキュンと妙な音がするので覗いてみると、茶色の塊がもぞもぞ動いている。捕まえてみると手のひらに乗るほどの子犬だった。後からわかったことだが、庭に入り込んできた野良犬の親子のうち、要領の悪い雄犬が一匹取り残されたようだった。

家には当時すでに犬がいたが、これも何かの縁だと思って飼うことにした。迷い込んで来た日が29日だったので、「フク」と名付けた。フクはものおじしない性格で、嫌がる先輩犬にまわりつき、やがて無理やり寝床に入り込んで一緒に寝るようになった。先輩犬が老衰で死んでからは、彼は人間のベッドに進出した。2才のころには中型犬に成長していたので、人間の方が小さくなって寝るはめになった。

活発なフクに異変が起きたのは9才を過ぎたころである。だんだん毛が抜けて寝ていることが多くなった。獣医に相談したが、原因はよくわからないという。老化現象かとあきらめていたとき、主治医が若い先生に代わった。初めての診察の日、彼は一目フクを見て、一度甲状腺を調べましようと言った。甲状腺は私の専門領域である。まさかと思ったが、数日後、彼から電話があった。採血の結果は甲状腺機能低下症だった。私は自らの不明を恥じた。

そんなフクの晩年には、思わぬ展開が待っていた。年をとって同居を始めた私の母が、家に寄り付いた3匹の野良猫の親子を飼いたいと言出したのである。私は母の寂しさを紛らせるのにちょうどいいと思い、母のいる離れで猫の親子を飼うことにした。しかし何分高齢である。自分では世話ができず、妻が面倒を見始めた。動物というのは敏感なもので、実際に世話をしてくれる人になつく。猫たちはやがて離れには居つかなくなり、我が家に入り込むようになった。

犬は一般的に猫が嫌いである。先輩犬は気が強く決して野良猫を庭に入れなかった。フクも最初は猫たちを拒否していたが、もともと

となしい性格で平和主義者である。猫たちは彼と仲良くと自分達が住みやすくなると思ったのか、だんだんと距離を詰めていき、やがて入れ替わり立ち代わりニャアニャアと体を擦りつけるようになった。腐っても犬である、猫にそういう態度をとられては犬の沽券はあったものではない。心中察するに余りあるが、時すでに遅し、猫どもは家中に進出してやりたい放題、傍若無人のふるまいである。中には寝ているフクの上で丸くなっていびきをかき奴までいる。そうして1年も経つと、彼らが一緒にいることがごく自然な景色になった。くっついて寝ている姿を眺めていると、お互いに結構幸せそうである。

そんな彼らの様子を見ていて、「嵐の夜に」というアニメ映画を思い出した。10年くらい前だったと思うが、狼と羊の友情を描いた作品で、「友達だけど美味しそう」というキャッチコピーが刺激的だった。当時は本能を超えた友情などメルヘンにすぎないと思っていたが、フクと猫たちを見ていると、ありうるかもしれないという気になってくる。ネットでは、猫と鳥、犬と猿など、天敵と言われている動物たちが仲良く暮らす様子が数多くアップされている。飢える心配がない状況では、種を超えた共存は案外簡単なのかもしれない。

翻って人の世を眺めてみると、世界は毎日、大小の争いで溢れている。たとえ民族が違っていても遺伝子にほとんど差がない同じ種なのに、人間同士の共存はことのほか難しいとみえる。他の生き物と違って、人間は欲張りで足るを知らない。そして自分で作り出した知識という怪物に振り回されている。その眼は我欲と偏見の塵で覆われていて、本当に大切なものを映し出すことができないのだろう。

「嵐の夜に」で主人公2匹が出会うのは、相手の姿が見えない真っ暗な洞窟の中である。人間が濁った眼を閉じて余計な物を見ず、互いの心を感じる事ができれば、人の世も少しは平和になるのではなからうか。

栄（SL 医療グループ）近辺 - 32 高校時代の生物実験

55年ほど昔の事です。私は当時高校の生物部に所属していて、勝手にマウスの実験などを楽しんでいました。この頃新潟地震があって、傾いた家に生活する人々の体調が良くないとニュースが有り、早速マウスを傾斜0度（平坦な普通の床）、5度、10度、15度の床に無理やり生活させ、その後の体重の変化を見たところ、床の傾斜が強いところで生活しているマウスで、より体重の減少が見られました。加えて当時自分で作成した歩行距離測定器で、マウスを広い平地であるかせたところ、これも床の傾斜が強いところで生活しているマウスで、

より移動距離が短いことも判りました。予測していた事実ですが、傾いた家で生活することの怖さを実感しました。この論文は当時の「Biology」と言う高校生向けの雑誌に掲載されました。その後小児科教授の指示で「てんかんセンター」に赴任し、いろいろな研究をしましたが、最も独創的で楽しかったのは上記の高校の時の実験です（実は生物部の同級生でこの実験をやってみたかったのですが、そうすると犯罪スレスレなので致しませんでした）。

森川クリニック 森川 建基



ESL 医療グループ

栄・中日ビル北斜向い
中区新栄町1-3 ☎951-3833

<http://www.sl-medical.gr.jp>

すぎやまレディスクリニック

院長 杉山 正子 ☎971-0930

吉田内科

院長 吉田 修 ☎951-0321

セントラル小児科

院長 森 孝生 ☎971-6237

三浦内科

院長 三浦 利重 ☎951-1255

渡辺クリニック

院長 渡辺 正樹 ☎955-5060

磯部内科クリニック

院長 磯部 智 ☎971-0515

第一歯科医院

院長 高木 昭英 ☎951-1355

SL外科・乳腺クリニック

院長 伊藤 由加志 ☎971-6269

栄内科

院長 山田 琢之 ☎955-8020

はまだ代謝内科

院長 濱田 洋司 ☎957-3701

古澤整形外科

院長 古澤 久俊 ☎954-0335

中川内科

院長 中川 喬市 ☎951-7532

栄かとうクリニック

院長 加藤 泰久 ☎961-3001

恒川内科

院長 恒川 誠 ☎951-1265

おの内科

院長 大野 秀樹 ☎971-0950

山川内科

院長 山川 育夫 ☎951-1211

岡神経科

院長 岡 潔 ☎955-1606

仲尾歯科

院長 仲尾 峰泰 ☎963-4182

古井脳神経外科

院長 古井 倫士 ☎951-2223

亀井内科・呼吸器科

院長 亀井 三博 ☎951-2577

さかもと内科腎クリニック

院長 坂本 いずみ ☎961-2061

夏目泌尿器科

院長 夏目 紘 ☎971-5715

やまうち消化器内科クリニック

院長 山内 学 ☎957-2488

セントラル皮膚科

院長 坪根 幹夫 ☎973-0495

すずき呼吸器クリニック

院長 鈴木 清 ☎265-7250

金子内科

院長 金子 晴生 ☎971-5801

長谷川内科

院長 長谷川 鐘三 ☎961-5923

こんどう女性クリニック

院長 近藤 育代 ☎951-0500

服部内科クリニック

院長 服部 正樹 ☎962-8500

森川クリニック

院長 森川 建基 ☎961-1709

えとうリウマチ整形外科

院長 衛藤 義人 ☎953-6022

塩瀬眼科

院長 土井 浩史 ☎951-1205

おおいわ消化器クリニック

院長 大岩 哲哉 ☎959-5560

たまい眼科ほのほのクリニック

院長 玉井 浩子 ☎955-8090

関谷耳鼻咽喉科

院長 関谷 芳正 ☎951-7799

サカエきこえの相談室

☎961-4133